

光源氏物語現行形態試論第七

長編始発説の意義

田村俊介

目次

序章 現行形態試論シリーズの紹介

第一章 「かの十六夜」人物呼称説への反論を巡って

第二章 長編小説の二重構造に就いて

第1節 「つじつま合わせ」に就いて

第2節 『カフマーズフの兄弟』の二重構造やその他に就いて

第三章 短編始発説を巡って

第四章 女性作中人物の抽象的形容語と『紫式部日記』の人間観

第五章 紫上の具体的描写と『紫式部日記』の人間観

第六章 長編始発説の意義の一つ

序章

光源氏物語現行形態試論のシリーズも本拙稿で七本目となる。過去の六本の拙稿（以下、「試論」、「試論第二」）、「試論第六」と略すことがある。）及び「かの十六夜の女君 葵巻晩秋の新解釈」で私が意図して来たのは、武田宗俊氏等先学によって切り開かれた成立論のボシ

タイプな再構築である。武田氏の「源氏物語の最初の形態」³⁾は、主として第一章、第三章、第五章、第七章に於いて、『源氏物語』の最初の三十三帖が紫上系十七帖と玉鬘系十六帖とに截然と分かれていることを明らかにした。私はこのような二つの系統の並列を執筆順序に拠って説明しようとせず、紫式部が意識的に作り上げた形態であると論述した。

右の卑見を名指して批判した論文はほとんど管見に入っていない。しかし暗に批判したようなもの、そうでなくとも卑見と対立するようなものは幾本がある。そうした先学同学の論文に第一章、第三章で詳しく触れて、論旨の補強となお一層の明確化につとめた。

第一章

まず私は、成立論争の争点となっていた、葵巻第二二〇「段落の

かの十六夜(いさよひ)のさやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまざまのすき事どもをかたみに限なく言ひあらはしたまふ」⁴⁾の解釈に力を注ぎ、「かの十六夜」は末摘花を指す人物呼称、「かの十六夜のさやかならざりし秋のこと」全体は末摘花巻八月の末摘花との新枕を指すことを論証した。その後、この箇所解釈に触れたものとして①～⑤が挙げられる。

- ①平成五年 (当該箇所担当：鈴木日出男氏) 新大系 三一七頁 注三八
 - ②平成十一年九月 吉岡曠氏「源氏物語の構造」『源氏物語研究集成』第四巻掲載
 - ③平成十一年一月 越野優子氏「源氏物語成立試論 初期巻々を中心として」『国文学論集』三一掲載⁵⁾
 - ④平成十二年 (当該箇所担当：塚原明弘氏) (該本の目次に拠る)『源氏物語の鑑賞と基礎知識』葵
 - ⑤平成十三年最終更新 渋谷栄一氏 インターネットの「源氏物語の世界」のサイト⁶⁾
- ①と②は「試論第六」で触れたので詳述は避ける。しかしその後でもできる限り冷静に総合的にずっと考え続けて来たのだが、やはり、わからない。①の担当の鈴木氏は学術誌で成立論史の概説をなさったことがあるし、同じ新大系校注者である今西祐一郎氏も玉鬘系後記説に関連する論文を最近上梓された自著に収めて居られる。同じく校注者の藤井貞和氏は「最も衝撃を受けた一冊」として武田宗俊氏の研究書を挙げて居られ、皆、この箇所の重要性はわかって居られるはずである。それにしても注三八⁷⁾が余りにも不十分・不明瞭と感ずるのは私一人であるつか。脚注は紙幅に余裕がないものであるが、新大系全五巻各巻巻末にはかなりの余裕がある。どうして、「かの十六夜」の解釈に触れ

る余裕は無いのだろうか。むしろ、恣意的に触れないようにしているとさえ思われて来る。日本古典文学の研究者は、自分の専門の作品で無くとも新大系という叢書は参照するものでもあるし、その辺りの理由を明らかにするようお願いしたい。

平成十二年、阿部好臣氏は「成立構想論の脱構築」の中で次のように述べている。

新派といひ旧派と言ふ、だが、しかし、それは平行的にありつつつづけていることに意味があるようにも思ふ。

「読み」は、その時代その時代の「読み」の中で、生き変わり続けるのだということ忘れてはなるまい。極端に聞こえるかもしれないが、作品の成立とは「読む」ことの中にしかない、ということなのである。成立 という言葉より、それは「たちあられ」とでも呼ぶべきかもしれない。

確かに、紫式部には様々な読みのいずれもが成り立つような懐の広さがある。「平行的にありつつつづけていることに意味がある」という措辞は有益であろう。しかしながら、今、問題にしているのは、原文解釈である。『源氏物語』注釈の一つ一つは、平安時代以外を専門とする国文学者にも注目されることになるだろうし、万一そこに注釈者の恣意が加わっていたとしたら、決して望ましい事態ではない。一つの仮説が逆に非学問的・非論理的な理由で支持・礼賛されるのも同じくらい望ましくないことは言うまでもない。

以上、誤解が絶対に無いとは言えないが、私が何年間も考えに考えて来た上での所感である。

③の越野氏の論述は次の通りである。

十六夜は未摘花自身説を可能とするには、巧みに行方をくらました源氏自身を揶揄しつつ象徴したこの歌(a)の「いさよひの月」の存在は、氏の認める通り大きな難関である。(b)。物語中「十六夜の月」が登場するのは未摘花の巻の前述の二例のみであるが、うち一例が源氏を指すという確率で、十六夜は未摘花自身説を主張するのにはやはり無理があると思われる。更にその「秋」の内容を考えてみたい。田村説では「未摘花の姿がはつきり(さやか)とは見えなかった秋の新枕のこと」と葵の巻の当該箇所を読むが、源氏のみが結局は「雪の光」まばゆき冬の朝その奇怪な容貌をまざまざと目にする事になるし、そして当該箇所は前述の如く源氏と中将の互いに共有する思い出(c)が語られそれを「言いあらはす」体をとっている。となれば、源氏しか知ることのない(d)未摘花自身の「容貌」がはつきり(さやか)に見えなかったとするのではなく、そして未摘花という「人物」を対象とするのではなく、二人に共通する話題の中での「さやかならざりし一件」という「出来事」こそが該当してくると思われるのだ。

部分的な引用になってしまったので補足説明すると、傍線 a 部は、未摘花巻春の段落、頭中将の詠歌
 もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月
 (55~56頁) (傍線とその直後のカッ)内は引用者

を指す。この歌が卑見の大きな難関だと私自身が認めたという傍線 b 部は、拙稿「かの十六夜の女君」25頁下段11行目~17行目

(葉)の「さやかならむらじ」の「の」解釈を「に」に行方をくらませたのは「きりわからない」とする通説は「さやか」の用法に照らし
 て、いささか無理が感じられるのである(甲)。未摘花巻春の段落、頭中将の詠歌「……入るかた見せぬいさよひの月」は確かに私にと
 って都合の悪い記事である(乙)。だが、私の立場から言つて、従来「この歌の印象が余りにも強く、多少引きすられ過ぎていたのでは
 ながるうか(丙)。(丸カッ)内、傍線とその直後の記号は今回新たに付け加えた。

のうち傍線 c 部のみを踏まえたのである。だが私は、葉巻の該文とこの歌とは結び着けるべきではないと傍線丙部で明言している。このよ
 うな卑見と越野氏が対立する原因は、「はつきり」という現代語訳であると思われる。「はつきり」という現代語は、誤訳ではない。しかし、
 平安時代の「さやか」と比べて、用法が広過ぎるのである。「さやか」の他の用例を漏れなく列挙すると、結婚や好色の相手の容貌を見る・
 見ないという時に使われることが圧倒的に多く、傍線甲部のような結論しか導き出すことができないのである。

いっぽう、「秋」の内容に関する、卑見と越野氏説との意見の対立は、「言ひあらはす」の現代語訳「暴露する」「すっは抜く」に原因があ
 る。なお、「言ひあらはす」は誤植である。越野氏は当該箇所「言ひあらはし」を、
 様々な「すぎ」と「暴露合戦」及び、

と解釈なさっている(54頁)が、既に述べて置いた通り「言ひあらはす」という複合動詞の他の用例は、その敬語体も含めて、行幸巻の「申
 しあらはし(じ)と(ま)」「と(第)三(三)頁以外には無い。」「申しあらはし」の主語は光源氏、「に」格の目的語は頭中将である点「言ひあらは
 し」と一致する。「を」格の目的語は「玉響が実は頭中将の妾子である」という打明け話であるから、「言ひあらはし」のそれと「源氏と中
 將の互いに共有する思ひ出(傍線 c 部)とするより、「源氏しか知ることのな(事件)傍線 d 部)とするべきである。

⑤の「注釈」の「かの十六夜のさやかならむらじ秋の」との項は「完訳日本の古典」の注を引用するのであるが、現代語訳は
 あの十六夜の、はつきりしなかつた秋の事件など、その他の事などの、いといろんな浮気話を互いに暴露などい合ひ、

である。④の「語句解釈」の欄の「かの十六夜のさやかならざりし秋の事」の項では、先行注釈書の諸説が挙げられた後、結局、「定めがたい」と結ばれているが、現代語訳

あの十六夜の月のあまり明るくはなかった秋の事など、またそうでない事も、様々の好色がましいことを互いに残らず言い立てなざるの、「言い立てなざる」という訳語も「暴露なざる」と近い。

しかしながら、「暴露台戦」といっつのは貴公子同士につき合いに於いて、いささか悪趣味で品が無い。

前拙稿ではこの葵巻第(二二〇)段落と、光源氏が朱雀帝のもとに参上して歎談する賢木巻第(二三三)段落との類似性を指摘したが、朱雀帝もそれまでは胸の内に秘めていた「かの斎宮の下りたまひし日のこと」を正直に打ち明け、つられて光源氏も六条御息所との別れのつらさを打ち明けている。葵巻第(二二〇)段落の源典侍事件もこの時初めての「暴露」ではないし、又、笑い話で済むような性質であった。未摘花事件は、光源氏が何ヶ月にも互って熱心に求愛して結ばれたという形になっているため、たとえその求愛が未摘花の容貌を見る前のことだったとは言え、そんな言い訳は通用せず一生責任を負わなければならなくなってしまったという、笑えない失敗譚である。そのような、人に触れてもらいたくない傷を、そうでなくとも傷心の晩秋に、暴露するといっつのはあまりにも友だち甲斐の無い頭中将ではないか。

但し、右は原文解釈の「根拠」として提出しているのではない。原文解釈の「根拠」として提出されるべきは、当該語の他の場面他の巻々の用例から帰納的に導き出される語義・用法であって、この場合は行幸巻の「申しあらはし」と第二巻133頁の語義・用法である。つまり『源氏物語』の研究は、帰納的な語義認定に基づいて推進して行くほうが、その言葉の真の意味で品の良い人間つきあいを学び取る結果につながることになりそつなのである。

第二章

1

以上、前章では、葵巻に未摘花巻を踏まえた記事があるという卑見を補足説明したつもりである。その結果、紫上系巻々に玉露系の記事を踏まえた箇所が無いという玉露系後記説の根拠は、「法則」としては成り立たないこととなった。だが、「法則」でなくとも、そのような「傾向」は確かに存在する。そこで、正伝と、傍流である玉露系との並列という傾向に関して、まず四十一帖の全体像に就いては『うつほ物語』

と『伊勢物語』、特に『うつほ』に拠って説明し、次に初期巻々に就いては『伊勢物語』の初期章段⁽⁶⁾に拠って説明してきた。その際最も理論的な主柱として仰いだ学者は藤村潔⁽⁷⁾氏であったが、藤村潔氏や私の研究(このようにお名前を並立させて頂くには私は余りにも未熟で卓小な学者であるが、失礼を寛恕願いたい)を評したのが、平成九年五月「新・源氏物語必携⁽⁸⁾」の高田祐彦氏「源氏物語研究の課題」である。

資料の制約によって(a)、成立論がおのずと今ある作品それ自体を対象とする構造論へと移行していった(b)のは、必然的だったといえよう。その後、研究がまったく途絶えたわけではないが、外部資料の不足という条件に大きな変化がないので、特別な進展は見えない。

それでもなお、ここで成立論に関する論議を見ておこうとするのは、現在の研究の主流が作品論としての構造論や表現論だからである。それらの論議では、成立という不確かな要素を除外する反面、作品と読み手との閉鎖的な空間の中で、じつま合わせに近い合理性の押し当てや、無限定な古代性の指定による裁断(c)がしばしば起こりうる。むしろ、成立の領域をも視野におさめて、場合によっては仮説を立てることによって、一回り大きい源氏物語を相手とするほうが、読み手としての我々に自己限定を施しつつ、実は豊かな読み手の立場を獲得する契機になる(d)と思われるのである。その意味で、成立論が投げかけてくる問題は、依然として重要なものを含んでいる。

(傍線と直後のカッコ内は引用者)

まず、傍線a部について、このような見方をする論者は最近とみに増えているように思われるが、正しいとは言えないだろう。武田宗俊氏の側に説得力な外部資料が不足していることは、初めからわかっていたのである。少なくとも私が、現行巻序に基づいた構造論(と呼べば呼べるようなもの)を書き続けているのは、武田氏が外部資料を十分に提出しなかったからではなく、武田氏の提出した内部徴証を平成三年に否定したからである。

次に傍線c部について。

『新必携』の三年後の平成十二年、阿部好臣氏は、「⁽⁹⁾じつま合わせに近い合理性の押し当てや、無限定な古代性の指定による裁断」とは具体的になにを言っているのか、よく判らない。

と述べているが、平成十三年現在、私にもよく判らない。しかし、『新必携』が出版された平成九年の時点で、傍線b部の言い方に即して言えば成立論から移行したところの構造論を(質的には藤村潔氏等先学諸氏に劣っていると)量的にはかなり多く、四、五本発表していた

ので、それらを評していると思わざるを得ないし、又、高田氏の念頭に私の四、五本が入っていなかったとしても関心を抱かざるを得なかったのである。

結論から申し上げれば、「つじつま合わせ」という言葉は、やや侮蔑的な語感を持っているので気にならなくもなかったが、そのような私の思い過ごしは別として、内容的には言い得て妙である。成立論否定とは基本的に「つじつま合わせ」に他ならない。

片桐洋一氏の『伊勢物語の研究』(研究篇)、『昭和四十三年』は『伊勢物語』全体を成立時期に拠って三つに分ける仮説を提唱した研究書として一般には知られているが、私は二次文献三次文献を経由せず、又、耳学問ではなしに、初めから一ページも飛ばさずに読んで行ったので、一番印象に残ったのは第一篇(八五頁)である。第一篇では『伊勢物語』に限らず、歌物語的文芸一般に関する鋭い考察がなされている。

例えば、『大和物語』第四百七十七段の第一部は、津の国の女が、地元の子と和泉の国の男と双方から求婚されて思い悩み、生田川に入水する物語であるが、第一部の第三首では「わたつづみ」に入水したことになる。また、第五首の「思ひくらぶの山は越ゆとも」は「鞍馬の山」を越えて津の国にやって来たことを意味し、二人目の男は和泉の国から津の国にやって来たという第一部の内容と異なっている。このようにつじつまが合わない話を『伊勢物語』全百二十五段の中から一つだけ挙げるとすれば、第四十五段であろう。昔男の詠んだ

ゆく螢雲のうへまで去ぬべくは

秋風ふくと雁に告げこせ

暮れがたき夏の口ぐらしながむれば

そのこととなく物ぞ悲しき

は、女の死を悼む和歌としては何ともおかしい。いや、自分に片思いして死んだ女であるかどうかに関わらず、人間の死を悼む和歌としてふさわしくない。やはりこの章段は、『雅平本業平集』、『在中将集』という外部資料に拠って段階的に成立過程を考察するという片桐氏のアプローチが極めて有効であり、かつ必要不可欠だと思っているのである。²⁾

このように、段階的に成立した文芸の場合第一の部分と後から増益された部分との間でしばしばつじつまが合わなくなる。源氏物語の場合、紫式部が『うつほ物語』と『伊勢物語』を尊重して両作品を融合したという見方を主軸に据えて全体の構造を把握し、その他幾つかの現象も

熟考すればつじつまを合わせることができる、という事実は消極的乍らも長編始発を証明しているように思う。

もともと、私が長期計画で執筆されたと考えている範囲は第四十一帖「幻」までである。

拙稿「試論第五」で述べた通り、『源氏物語』の語り手は、光源氏らに仕えた古女房という設定である。彼女の年齢を、桐壺巻頭の時点で十余歳であったとしよう。その場合、夢浮橋巻末で九十余歳である。九十余歳まで耄碌もせず語り続けるのも絶対に不可能とは言えないが、それより幻巻の六十代後半というのが当時としてはちょうどよい年齢であろう。ただ、紫式部は前編四十一帖脱稿後、これを余りに理想主義的・楽天的だと見なすような世界観・文学観を抱くようになり、語り手の年齢設定の不自然を犯してまで、後編の巻々を書き進んで行ったであろう。

宇治十帖の場合、手習巻で宇治大君が物の怪に取り憑かれて死んだとされている点、自らの結婚拒否の意志を貫くため自殺したとする総角巻と対立する。物怪がうそをついたと解釈する余地は勿論無い。横川僧都に調伏されて降参した時の発言であり、うそをつく余裕など全く無かったはずだ。やはり、「自殺」というものに関する紫式部の見解が、手習巻執筆の時点では、変化、若しくは、成長した結果だと思ふ。また、宇治八の宮が中将の君と再婚して浮舟を産んだという宿木巻以降の物語は、北の方の死後「例の人のさまなる心ばへなど戯れにても思し出でたまはざりけり。」という橋姫巻とつじつまが合わない。武田宗俊氏が強調する「作者の精神発展」説は、実は、宇治十帖の段階的執筆の理由を説明するために用いた方が有効なのである。そして、宿木巻や手習巻が「その頃」という不定の時を示す言葉と新出人物の紹介で始まっているのは、言い換えれば新しい物語の始まりを予告するような巻頭を持っているのはそれ以前の巻々を否定、若しくは相対化しようという宣言でもある。前編全四十一帖は、この上なく長い作品であるにもかかわらず、右の二つのように主人公の人間像をぐらつかせるような重大な矛盾が無く、せいぜい紫上の桜が二条院（御法巻）か六条院（幻巻）かという程度のつじつまの合わなさを留まっている事実は看過されるべきではないだろう。

最後に、高田氏は傍線d部で、「成立過程の仮説を立てることによって、豊かな読み手の立場を獲得する」という主旨のことを述べて居られるようだが、私も確かにそうかもしれないと思ふ。しかし、現行の『源氏物語』を順番に進んで行けば、高田氏は「豊かでない」と感じるかもしれないが、「第二の豊かさ」が獲得できる。第二の豊かさを求める読み手は玉鬘系後記説を否定し、例えば葵巻の一文一文の指示対象を玉鬘系巻々から探し出し、第一の豊かさを求める読み手は、特定の巻々の後記挿入を仮説したり「輝く日の言」巻など欠巻を想定したりす

る、というのは本末転倒ではなからうか。成立過程の研究はできる限り、客観的に行なわれなくてはならない。古代文学の場合、確かに資料が乏しいが、その乏しい資料を最大限活用して研究して行った方が、「豊かである」「豊かでない」「面白い」「面白くない」と言つような主観に基づいて結論を出すよりも遙かに学問的であろう。その結果、後記搜入説が立証されるのならば第一の豊かさを獲得するべきなのであつて、同じ物語文学で言えば、まさに前記『伊勢物語の研究（研究篇）』や昭和六十二年『伊勢物語の新研究』がこれに当たる。しかしながら、『源氏物語』の場合、第1節でも触れた「かの十六夜」の解釈等々に基づいて幾種類かの後記搜入説は否定せざるを得ず、ひとまず（と言つのは、現行巻序の成立を疑う新たな根拠が提出されないうちは、という意味であるが）第二の豊かさを享受することにした。

2

現行形態の光源氏物語を前から順番に読んで行った場合には、無尽蔵の魅力がある。その魅力の幾つかについては、このシリーズの拙稿でも述べてきたつもりであるが、本拙稿では、フランスやロシアの長編小説に匹敵する構成の高度さを再び取り上げたい。二十世紀に書かれたフランスのマルセル・ブルースト『失なわれた時を求めて』や、十九世紀ロシア、トルストイ『戦争と平和』、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』である。ヨーロッパ民族が十九世紀や二十世紀にたどりついた高度な構成を我が紫式部は八百年も前から造り上げていたことが明らかになれば、胸踊る思いがするではないか。が、武田宗俊氏や和辻哲郎氏、風巻景次郎氏が言われるように初期巻々やその構成に欠陥があるとすれば、光源氏物語がいくら長くとも、ロシアの両巨頭に匹敵するとは言いにくくなる懸念が出てくるから、「つじつま合わせ」と言われようとも、何と言われようとも、現行形態を擁護する研究は今後も続けられなくてはならない。

さて、三つの長編のうち前二者はこのシリーズで紹介したこともあるので、今回は「カラマーゾフの兄弟」に着目したい。「兄弟」とは三兄弟であり、父親不詳の私生児も含めれば四兄弟であるが、小説全体は、三男アレクセイを中心とする系列と、他の三人を中心とする系列とに分かれている。アレクセイ系ではアレクセイと子供達との交流が話題となるが多く、もう一方の系の話題は、長男ドミートリイと父親の憎しみ合い、その父親が被害者である殺人事件である。現存本は新潮文庫で言えば一冊約五百頁三分冊であるが、ドストエフスキーの病死がもつと後だったら、これと同じぐらいの量の続編が書かれるはずであり、そこに於いてはアレクセイ系の比重がかなり大きくなったはずである。が、現存約千五百頁も、「ドミートリイ系の章」と「アレクセイ系の章」との二重構造と見なすことができるし、又、ちょうど薄標巻

巻末から絵合巻巻頭へ、少女巻巻末から梅枝巻巻頭へのスムーズな接続が玉響系巻々によって分断されてしまうのと同じような現象を指摘することもできる。興味深いのは、続編までを念頭に置いた自序に於いて、一方では時間の無駄であると言って投げ出す者が居ることを覚悟しつつも、こうした長編小説を律義に読み通す読者もいると述べていることである。おそらく長編小説が二つの系列に分かれてしまうことはドストエフスキーも承知の上だったのである。そしてこのような二重構造を「最後まで読みとおそうとする親切な読者もいる」ことも確信していたのである。⁽⁵⁾

『源氏物語』の読者に関しては、『更級日記』が参考資料となる。孝標女は、奇しくも寛弘五年（一〇〇八）、『源氏』が宮中で話題になった年に生まれた。そして、十四歳の治安元年（一〇二二）、「昼は日暮らし、夜は目のさめたる限り」、『源氏物語』五十余帖を熟読した。このような読者を、しかし、玉上琢彌氏は真の読者の中に入れて、真の読者は、都の権門の姫君数名だけだと言いつつ、私は中野幸一氏に従って、孝標女も真の読者の一人に加えたい。そればかりではない。ロシアのどこかに「最後まで読みとおそうとする親切な読者もいる」という確信が、世界文学の最高峰とも言われる『カラマーゾフの兄弟』を産んだように、日本のどこかに孝標女がいるという確信が長編『源氏物語』の計画・執筆の源泉となったのである。その意味で、たとえ、社会的地位が低くとも、また、たとえ、公任や定家のような知識人としての名声・権威が無くとも、孝標女こそ第一読者の名にふさわしいのである。

私は「長編小説」という言葉を、三作品を典型とする虚構文学作品という意味で用いている。千五百ページにも二千ページにも及ぶそれらの作品にも、少しぐらいの構想変更や作家のケアレミスミスによって、後のほうの記述が前のほうの記述と齟齬する点が見い出されてしまう。⁽⁶⁾ そのような三作品が「長編小説」の名にふさわしくないと言うのであれば、私は『源氏物語』に就いても直ちに長編始発説を撤回する。しかし、神ならぬ者の小説執筆の営みは、頭の中に初めから存在する千五百ページをそのまま書き下すというふうなものではなくて、頭の中に初めから存在するのはやはり大まかな構想だけであり、細部についてはその部分を執筆する時点で新たに着想したり前からの着想を調整したり、というふうなものだったと思う。例えば、光源氏が自由奔放に過ぎる青春時代のつけが回って、須磨・明石を放浪するという大まかな構想は、倭達の物語を初めとする多くの先蹤もあり始めから決められていたが、細部について言えば、その自由奔放な青春はもう少し短い年に収める予定だったのでなかろうか。明石の上が初登場の若紫の巻で既に多くの求婚を受ける年齢に達していて、約八帖後、約九年後の明石巻の十

八歳という年齢と、ほんの少し齟齬しているのも、(若紫巻の求婚者達が早急に結婚を求めているのではなく、「三年先の結婚を約束してもらおうとしているだけである」という解釈がもし成り立たないとすれば)そのような事情に由来するのかもしれない。

第三章

集成『源氏物語』第一巻の解説では次のように述べられている。

主人公の生涯を、物語の一箇の有機的世界として構成するのではなく、四十年の時間的経過に従って、主人公に相對する一人の女性の恋物語を以って繋ぎ合せてゆく方法を採用している。したがって、一編一編がかなり完結性の強い独立した様相を呈するのも自然な成行きであろう。帚木、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里と、第一部の巻々を辿ってみると、そこにはほぼ、光源氏に配するに、一巻ごとに新しい女性が登場して、各々の巻はそれぞれ主人公とその女性との個別の恋物語なのである。空蟬、夕顔、紫の上、末摘花、源典侍、朧月夜の尚侍、葵の上、六条の御息所、花散里などのヒロインたちは、それぞれの巻において光源氏との出逢いがあるだけで、各女性たち相互の葛藤は見られない。わずかに葵の上と六条の御息所の確執が葵の巻に見える程度であるつか(a)。このような各巻の孤立性は、『竹取物語』の五人の貴公子の求婚譚が、相互に多角的な関係を持たず個別的羅列的であることに類似しているし、『一巻ごとに積み上げて主人公の一生を語るといふ形は、『伊勢物語』の小段の排列を想起させるものがある(b)。

しかし、女性が他の女性と交渉したり葛藤したりすることが、葵祭のような非日常の空間を除いて、少ない(傍線a部)というのは、平安時代の生活習慣だったのではなからうか。「昔、男ありけり。……」「昔、男ありけり。……」と仕切り直しを繰り返す『伊勢物語』とは違って(傍線b部参照)、『源氏』の各巻は見かけ程孤立していないと私は思う。確かに他の巻の記事と直接交渉する記事は少ないかもしれないが、他の巻の記事と相互補完的に読んだほうが鑑賞が深まる場面は随所に存在する。

例えば、第二十帖「朝顔」の朝顔贈答歌の場面は、それ以前の十九の巻々と直接交渉してはいないように見える。しかし、光源氏十七歳の夏、第二帖「帚木」の女房たちの噂話を踏まえたほうが鑑賞が深まること、「試論第三」⁽⁶⁾で述べて置いた通りである。正確には、十七歳の夏の記事と言つより、その夏の記事から窺い知られる、七、八ヶ月前の秋の出来事を踏まえるべきなのである。その秋の、朝顔の花が添えられた贈答歌の場面は具体的に書かれていない。具体的に書かれている、朝顔巻の二度目の贈答歌の場面は、朝顔と光源氏の恋愛の歴史の中で後

「日談」として位置づけられるものなのである。

人物呼称からも朝顔と対をなす夕顔の物語も同じである。

第四帖「夕顔」に描かれた夕顔と光源氏との恋愛は、それ以前の三つの巻々と直接交渉してはいないように見える。しかし、「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ 心細く」(一六〇頁)という歌に込められた、夕顔の男性不信観は、第二帖「帚木」の梅雨の季節の記事を踏まえなければ、正確には、梅雨の季節の記事というより、その記事から窺い知られる、九、十ヶ月前の頭中将とのつらい体験を踏まえなければ到底理解できない。我々『源氏物語』の読者の間では夕顔は光源氏の恋人として知られているが、つき合った期間から考えても、まず第一に「頭中将の妻」と言つべきなのである。彼女は、その頭中将を前にして次のような和歌を詠んでいる。

うち払ふ袖も露けきとこなつに風吹きそふ秋も来にけり

(「帚木」。83頁)

「秋も来(ぬ)」は女性の男性に対する常套句と言つてよいが、「風吹きそふ」は、やはり、尋常ならぬ救助信号であり、中将の正妻の実家からの脅迫を暗示している(頭注参照)。にもかかわらず、「またとだえおきてはべりし」(83頁)とは何と不誠実なことであろうか。頭中将の場合は日が浅くなく、もう二年以上も交際していた夕顔の明らかな脅えを受け止めきれなかったのは無神経、若しくは不誠実の誇りは免れない。

このように夕顔巻は決して独立した短編小説として読むべきではなく、むしろ夕顔の人生に即して言えば「後日談」として位置づけられるものなのである。

第四章

以上前章迄で述べて来た通り、光源氏の物語は、一箇の有機的な世界と成るように、初めから計画され執筆されていったものであった。このシリーズの六本の拙稿、特に「試論」及び「試論第六」で明らかにしたように、その計画とは正伝の原型を『伊勢物語』に、傍流の原型を『つひは物語』第二主題系にする、傍流の後半はあて言求婚譚を原型とする求婚譚にする、といったようなものであった。その求婚譚の主役が夕顔の遺児であったことまで計画に入っていたかどうかについては、断定を控えておきたい。主役の座は初めの予定では、既に登場してい

る、玉璽以外の女性、若しくは、既に登場している、夕顔以外の人物の娘に与えられるはずだったかもしれないし、全く新しく登場する女性
が起用される可能性もあった。しかし、主役は誰であれ、求婚譚が置かれること自体は決まっていた。その求婚譚の辺りまでの長期性は紫式
部の初めの大まかな計画が持っていた、と私は思うのである。

では、このような一箇の有機的な世界の中で紫式部は何を訴えたかったのか。藤岡作太郎氏は次のように述べている。

源氏物語の本意は実は婦人の評論にあり、著者が深く儕輩の態度進止に注意して、みずからその見聞を筆に残せるは、紫式部日記これを
証す。著者は観察を積み、考覈を重ね、こゝに一篇偉大の小説を作りて、婦人に対する意見を發表せり。¹⁷

本章では、以下、この発言に基づいて論述して行きたい。

光源氏は、若菜下巻で過去の女性遍歴を回想しつつ、「おいちか」さに欠けた女性として、葵上、六条御息所、明石上を挙げている。これ
を第一のグループとする。葵上評は、

大将の母君を、幼かりしほどに見そめて、やむことなくえ避ちぬ筋には思ひしを、常に仲よからず、隔てある心地してやみにしこそ、
今思へばいとほしく悔しくもあれ、また、わが過ちにのみもあらざりけりなど、心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしく重りかにて、そ
のこの飽かぬかなとおぼゆることもなかりき。ただ、いとあまり乱れたるところなく、すすしく、すこしさかしくやいふべかりけ
むと思ふには頼もしく、見るにはわづらはしかりし人さまになむ。
(2008頁14行～2009頁6行)

であり、直後の六条御息所評(後半は略す)は、

中宮の御母御息所なむ、さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でらるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになむありし。恨
むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨せられしこそ、いと苦しかりしが。心ゆるびなく恥づかし
くて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦みをかはさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるることやなむ、
あまりつくるひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。
(2009頁7～14行)

である。二人の女性の性格が似通っていることは明らかであろうが、特に「見るにはわづらはしかりし人さま」と「人見えにくく、苦しかり
しさま」など同内容であり、その結果、光源氏との関係は「隔てある」、「隔たりし仲」となってしまう。

「隔て」を生じさせる「こ」は回避できたが、「深きところ」、「うちとけぬ気色」、「恥づかしきところ」など二人とも共通する特徴を持って

るのが、直後に評されている明石上(210頁7行、211頁1行)である。

一方、「おいらかなり」と非常によく似た意味を持つ形容動詞に「おほどかなり」があるが、⁽¹⁸⁾「おほどかなり」に過ぎて、或いは、「おほどか」に過ぎて非難されたグループには夕顔、女三言がいる。

人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重き方はおくれて、

(夕顔)。一巻153頁

母君(=夕顔)は、ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし、これ(=玉鬘)は気高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。

(玉鬘)。三巻117頁。カッ内は引用者

に拠れば、少なくとも光源氏の目に映った夕顔とは「おほどか」に過ぎた女性であり、「もの深し」、「重し」、「恥づかしげ」など第一グループの女性を持っていた特徴を備えていなかったようである。女三言も、光源氏には、

ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくつくしきさましたまへり。院の帝(=父である朱雀院)は、男々しくよくかなる方の御才などこそ、心もとなくおはしますと世人思ひためれ、をかしき筋、なまめきゆるゆるしき方は人にまさりたまへるを、などてかくおいらかに生ほしたてたまひけむ、

(若菜上)。四巻73〜74頁。カッ内は引用者

のように思われ、夢中で恋する柏木にさえ、

よきやうとても、あまりひたおもむきにおほどかにあてなる人は、世のありさまも知らず、かつさぶらふ人に心おきたまふこともなくて、かくいとほしき御身のためも人のためもいみじきことにもあるかな、

(若菜下)。四巻259頁

のように思われている。雲居雁もやはり、

何ごとまただおいらかにうちおほひきたるさまして、子どもあつかひを暇なく次々したまへば、をかしきところもなくおほゆ。さすがに、腹あしくてもねたみうちしたる、愛敬づきてうつくしき人さまにぞものしたまふめる。

(若菜下)。四巻203頁

と評されている。

第三のグループは、二つのグループの良さを兼ね備えた女性達で藤壺、紫上、玉鬘が挙げられる。まず、藤壺は、

やはらかにおびれたるものから、深つよじつきたるところの並びなくものしたまひし

(朝顔)。二巻492頁

と評されているが、「やはらが」とは夕顔評にも用いられた形容語であり前半は第二のグループの長所、「深つ」は明石上評の「深きところ」や六条御息所評の「心深く」と同内容であり後半は第一のグループの長所であること明らかである。紫上も、夕霧に、

紫の御用意、気色の、^二「^一この年の終ぬれど、ともかくも漏れ出で、見え聞こえたるところなく、しつやかなるを本として、さすがに心うつくしく、人をも消たす身をもやむことなく、心にくもてなしそへたまへること」(若菜上)。(四巻134頁)

と評されているが、「心うつくしく、人をも消たす」が第二のグループの長所、「身をもやむことなく、心にくく」が第一のグループの長所であること明らかである。

「このように中傭の性格を良しとする、光源氏物語の女性観は、『紫式部日記』の同僚評と軌を一にする。『日記』の同僚評は、もともと欠点の無い女性のみを対象とするという前口上)……いかにそやなど、すこしもかたほなるは、いひはべらじ。こゝで始められたものであるが、本当に欠点の無い理想の女性として挙げられているのは、筆頭の、北野の宰相の君一人であると言つてよい。

宰相の君は、北野の三位のよ、ふくらかに、いと様態にまめかしう、かどかどしきかたちしたる人の、うち見たるよりも、見もてゆくに、こゝになくうすまざり、うらうらうしくて、口つきに、恥づかしげさも、にほひやかなることと添ひたり。もてなしいとびびしく、はなやかにぞ見えたまへる。心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、またいと恥づかしきところ添ひたり。(四六)⁽¹⁹⁾

「このうち特に」「心うつくしきものから、またいと恥づかしきところ添ひたり」などは、先に記した紫上評と酷似して居り、更につけ加えるならば「うす見たるよりも、見もてゆく」に「こゝになくうすまざり」は、先には引用しなかつた紫上評

東の対にさぶらひし人々も、みな渡り参りしはじめは、なかさしもあらむと思ひしかど、見たてまつり馴るるままに、なつかしうをかしき御ありさま、まめやかなる御心はへも思ひやり深つあはれなれば、まかで散るもなし。なべてならぬ際の人々にはほの見えなどしたまふ。そこらの中にすべれたる御心ざしもことわりなりけりと見たてまつる。(須磨)。(二巻207頁)

さし並び目離れす見たてまつりたまへる年ころよりも、対の上の御ありさまそなほありがたく、我ながらも生ほしたてけりと思す。一夜のほど、朝の間も恋しくおほつかなく、いととしき御心ざしのまざるを、なかかくおほゆらんとゆゆしきまでなむ。

去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさましたまへる(若菜上)。(四巻74頁)
(同前)。(89頁)

と通底している。

光源氏物語、『紫式部日記』、それぞれの作品に於ける理想的女性像のこれ程までの一致は、次の吉沢義則氏の文章を裏証する根拠となるだろう。

紫式部日記の後に附いてある同僚批判や帚木春の雨夜の品定で見ると、式部は人物批判乃至は人生批判に強い興味を有つてゐたやうである。若し現代に生れしめたならば、堂々論陣を張つて婦人を裁き人生を裁き婦人道を説き人生道を説いたであらう。けれども式部の時代に於ては婦人が裁いたりことわつたり、すべて道々しき口のきき方をするとは極度の嫌悪を以て封じられてゐたのである。固より史論といったやうなものは婦人の筆にすべきものでは無かつた。しかも式部の鋭い批評眼に映じくる世相は日毎夜毎に式部の筆持つ手をゆすりつゞけたであらう。さうした絶えざる衝動のはけ口は小説の世界以外に見出すことは出来なかつたであらう。即ち實世間に題材をかりて纔に日頃懐抱せる人生の歸趨を表現したのが、『源氏物語一篇』であつた。

即ち、紫式部が日頃抱いていた女性観を発表するのが『源氏物語』執筆の動機であり、又前編全四十一帖の第一主題であつたと私も思うのである。

ところで、『紫式部日記』に基づいて物語の第一主題を探るといふ研究方法に関連して、座談会「源氏物語研究の展望」を引用せざるを得ない。

たとえば、『源氏物語』であれば、『紫式部日記』や『紫式部集』との関連を言つて、「こことここが似ているからこゝういふ解釈も生まれるのではないか」といふこと (a) を少し言つと、いきなり、テキストに作者をもちこむなという厳しい批判 (b) があちこちから来たりして、何も言えなくなつてしまふ。「作者」といふ言葉がいけなくて、「作家」と言い換えればいいのかもしませんが、作者と言つて、それだけでアレルギーを起す方もいて、そこから話が續かなくなつてしまつて、別世界の人という感じにされてしまふことでもあります (c)。しかし、それが創造的な読みに向かうのなら、もちろんたとえば登場人物のこの人は歴史上の誰であるということを決定的よくな読みが最終的な結論になるよくな論であつたら、それは実証的ではあつてもテキスト論の立場からは非生産的なのかも知れませんが、とも、作者や外部の資料からの研究がテキスト論を豊かにするのであれば、そんなにアレルギーを起こしたり、全く論文を読まないとか、関係ない人たちという切り捨て方をする必要はないのではないかと思います (d)。そのようなあり方は、テキスト論 (e) を自己完結

させていただきますがします。

(15～16頁。傍線と直後のカッ「内は引用者」)

傍線a部がどなたのどの論文を指しているのかは判然としない。この座談会記録は、実は、8頁から74頁までに及ぶ長大なものであったのだが、全体を見渡してもやはり判然としなかった。だが、傍線a部の論文に対して、傍線c部のような反応が起こるとすると、たとえ発言者の消極的な弁護(傍線d部)があったとしても、私も、ひとことならず、恐怖を禁じ得ない。傍線a部の方も「アレルギー」反応におびえて、他の研究分野への転向を余儀なくされ、一生、或いは、しばらくの間、人物論・作品論の分野では「何も言えなくなってしまう」ったというのであれば、重大な問題である。

しかし、「アレルギー」という言葉を比喻を一切抜かして和語に直すならば、「論理を越えた、激しい嫌悪感」とでもいうものだろう。十一世紀初頭、寛弘の頃に書かれた『源氏物語』の研究が、昭和や平成の学者たちの好き嫌いの感情に統制されるというのは、いったいどういうことか。それはもはや、寛弘の作品の研究でなくなってしまうのではないか。

私は今まで「嫌悪感」に基づいて他人の論文を批判したことはない。本拙稿に於いても勿論そうである。『紫式部日記』(四六)を重視する本拙稿本章に対しても、どうか、「論理を越えた嫌悪感」や嫌悪感に基づく「厳しい批判」(傍線b部参照)は無いようをお願いしたい。いや、嫌悪感なら嫌悪感で仕方が無い。それでも、認めるところは認めて下さるよう、認めぬところは論理的な反論を提出するよう、傍線c部の方々(に就いてはまして判然としないが)をお願いする次第である。

傍線e部の「テキスト論」の立場というものも、作者の「履歴」や「私生活」を作品の評価に持ち込むことを否定しているのであって、他の作品からその作者の「思想」を探り出し当該作品の解釈に活用するという方法はむしろ積極的に実践している。テキスト論の内容を具体的に示したロラン・バルトの『S/Z』という書物は、言うまでもなく、オノレ・ド・バルザックの中編小説『Sarrasine サラジーヌ』の研究書であるが、小説の一文一文の訓詁注釈561項目と、その合い間合い間にはさまれた、だいたい1ページ程度のバルトの補助論文93項目から構成されている。そのうち、特に後者の47項目の

S/Z

という項目、66項目の

Le visible I : 『Tout se tient』

という項目(47、66という数字は原書ではローマ数字大文字)で、Z・マルカスという悲劇的な男性を主人公とした、同じバルザックの『Z・マルカス』を引用している。そしてそれは、サラジューヌという悲劇的な男性を主人公とした『サラジューヌ』を理解する上で妥当であり、非常に貴重な引用であったと私も思う。『紫式部日記』を引用する本拙稿の立場も、紫式部の「履歴」や「私生活」を『源氏物語』の解釈に直結させようというのではなく、他の人物への褒貶から彼女の「思想」を探り出し『源氏』の理解に役立てようという姿勢を曲がりなりにも取っているのだから、決して、「テキスト論」的研究方法と対立するものではないと自分では思っているのだが、いかがであろうか。

テキスト論を標榜するのが伝統的な日本古典文学研究の権威を失墜させ古いタイプの学者にいたすらに不安を抱かせる目的ではなく、純粋にバルトへの共鳴に由来しているのであれば、『S/Z』という書物は広く読まれて然るべきである。最低でもその日本語訳は広く読まれて然るべきである。そして、バルトやバルザックは、『源氏』研究のために参考になってもならなくても、十分に読み甲斐があると私は確信しているのである。

第五章

光源氏物語大尾を飾る幻巻に描かれているのは、言うまでもなく、紫上哀悼に明け暮れる光源氏の姿である。では、この巻に記された、新春から歳暮までの一年間で、彼女を慕う源氏の気持が最高潮に達するのはいつであるか。それは次に引用する「春暮のころ」であろう。源氏は十年程前の、ちょうど同じ季節を思い出している。

入道の宮の渡りはじめたまへりしほど、そのをりはしも、色にはさらに出だしたまはざりしかど、事にふれつつ、あぢきなわのわざやと思ひたまへりし気色のあはれなりし中にも、雪降りたりし曉に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて、空のけしきはげしかりしに、いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らしたまへりけるをひき隠し、せめて紛らはしたまへりしほどの用意などを、夜もすがら、夢にても、または、いかならむ世にかと思ひつつけらる。

(二二)。四巻523〜524頁

女三宮が降嫁して間もない頃のある寒い夜明け、紫上は涙でひどく濡れた袖をひき隠し、気付かれまいと精一杯努めたことがあった。そのような振舞いこそ、夢でもいい、来世でも来々世でもいいから、何とかしてもう一度会いたいと一晚中思い続けてしまつような心境へと光源氏を導いたのである。

「この時の紫上をもう少し詳しく見るために、「若菜上」「十五」段落に戻ることにしよう。

御格子うち叩きたまふも、久しくかかることなかりつるならひに、人々も空寝をしつつ、やや待たせてまつりて引き上げたり。「こよなく久しかりつるに、身も冷えにけるは。怖ぢきこゆる心のおるかならぬにこそあめれ。さるは、罪もなしや」とて、御衣ひきやりなどしたまふに、すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠して、うらもなくなつかしきものから、うちとけてはたあらぬ御用意など、いと恥づかしげにをかし。

幻巻に「雪降りたりし暁」と記されたのは、ここに引用した女三宮降嫁三日目の夜明けである。作者は、

「幻」 わが身も冷え入る

「若菜上」 「身も冷えにけるは。」

「幻」 いとなつかしうおいらかなるものから

「若菜上」 うらもなくなつかしきものから

「幻」 袖のいたう泣き濡らしたまへりけるをひき隠し、

「若菜上」 すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠し、

のように意識的に語句を呼応させることによって、源氏が回想した「暁」を特定しようとしている。最後の一組の「いたう」と「すこし」の韻語は光源氏の記憶の中で、紫上がより悲劇性を増したということだろう。その三日目とは紫上が一睡もせず迎えた夜明けであった。

あまり久しき宵居も例ならず、人や咎めむ、と心の鬼に思して入りたまひぬれば、御衾あまりぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れのをりなどを思し出づれば、今はとかけ離れたまひても、ただ同じ世の中に聞きたてまつらましかばと、わが身のこととはうちおき、あたらしく悲しかりしありさまぞかし、さてその紛れに、我も人も命たへずなりなましかば、言ふかひあらまし世かは、と思しなほす。風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寝入られたまはぬを、近くさぶらふ人々あやしとや聞かむと、うちも身じろきたまはぬも、なほいと苦しげなり。夜深き鶏の声の聞こえたるものあはれなり。

(一四)。四巻67～68頁

紫上はなかなか寝つけなかった。しかし一緒に寝ている女房達に心配を掛けてはいけなからと、寝返り一つ打たなかった。そのため

ます寝苦しい思いをしながら鶏の声を聞くことになってしまった。紫上のこのような配慮は必ずしもほめられたものではない。紫上は遺伝で胸が悪かった。「胸が悪い」とは、現代で言えば、「心臓が悪い」ということだろう。実母が早世したのもそのせいであろう。しかしながら、この一夜に象徴されるような紫上の嫉妬の苦しみとその苦しみを押し殺そうとする配慮は、女房達の口を通して、光源氏の耳に入ってしまったことが推測できる。幻巻引用文の直前に

そのをりの事の心をも知り、今も近う仕つまつる人々は、ほのほの聞こえ出づるもあり。
と書かれているからである。

ところで、眠れぬ夜の紫上は現在直面している不幸を不幸と思わないようにするために、光源氏の須磨流論という過去を回想し、「思ひなほ」している。「思ひ直す」を簡単に説明してしまえば、「思ひ返す」が前に思っていたことを100%撤回する意であるのに対し、50%修正するというような意である。

女三宮降嫁に勝るとも劣らない試練があった須磨巻に戻ることにしよう。

この巻の初めには、須磨の地へ向けて出発する三日前から、今まで交際してきた主だった人々に次々と別れを告げる光源氏の様子が克明に描写されている。今、その概略を新編全集本の小見出しを使って紹介することにする。

- 〔一〕 左大臣邸を訪れて人々と別れを惜しむ
- 〔二〕 源氏、二条院で紫の上と嘆きをかわす
- 〔三〕 源氏、花散里を訪れて懐旧の情をかわす
- 〔四〕 源氏、旅立ちの準備 邸内所領の処置をきめる（「わが御方の中務、中将などやうの人々」、「若君の御乳母たち」、花散里のことにも少しだけ言及されている 引用者注）
- 〔五〕 源氏、朧月夜と忍んで消息をかわす
- 〔六〕 藤壺の宮へ参上 次いで故院の山陵を拝む
- 〔七〕 東宮方の女房ら、源氏の悲運を嘆く
- 〔八〕 源氏、紫の上とも別れて須磨の浦へ行く

以上「二二」～「一九」段落の中で、紫上の場合だけ、「三三」と「一九」と二度に亙って別れの場面が設けられていることは注目に値する。その理由は紫上の扱いの重さを読者に印象付けようとしたためだ、と言ってしまうはそれまでだが、しかし、それだけの理由なら、重い扱いをするだけで良い。二つの段落に分けて扱われている以上、やはり、両者の対照性を読み取る必要がある。

「一九」段落は出発直前の場面である。

「生ける世の別れを知らず契りつつ命を人にかぎりけるかな

はかなし」など、あさはかに聞こえなしたまへば、

惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしはしとどめてしかな

げにさぞ思さるらむといと見棄てがたけれど、明けはてなばはしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。

(186頁)

夫婦水入らずのとき、紫上は、「寿命が縮まってもよいから、その分、あなたとの別れを少しでも延期したい」と詠んだ。『無名草子』が「いと人わろけれ」と非難する程、感情をストレートに表現した詠み様である。それに対し、来客があつた「三三」段落ではどうか。

「こよなうこそおもとらへにけれ。この影のやうにや瘦せてはへる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君、涙を一目浮けて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかけは離れじ

と聞こえたまへば、

別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなくさめてまし

柱隠れにみ隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、なほこら見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の御ありさまなり。

(173頁)

反実仮想で感情を抑えた詠み様をし、柱の陰に隠れて、目にいっぱいにたまつた涙を紛らわした。そんな仕草が、他の女性達への優越を光源氏に印象付けているのである。

以上見てきた「若菜上」「須磨」「両巻の紫上には顕著な共通点がある。即ち、悲しみのさなかにあつてその悲しみを抑制し、夫にだけは「寂しい」「一緒に居てほしい」という気持をつい伝えてしまふ素直さを持ち合わせつつも、世間には自分の苦しみをひたすら包み隠そうとして

いる点である。

このような紫上を礼賛する光源氏や語り手の人間観は、彰子中宮を礼賛する紫式部のそれと全く同じである。

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめしつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあや。」
(一一)

近くに伺候している女房たちに心配をかけてはいけなからとお産を前にした苦しみをさりげなく隠している中宮の様子に、「よろづ忘らるる」自分自身の心の動きが描かれている。光源氏の物語の中で作者が一番力を注ぎ、何よりも強く読者に訴えかけたのが紫上の人間像だったことは、『このよつ』、『紫式部日記』によって実証されるのである。萩谷朴氏も

左衛門の誓

「あなかし」。此のわたり、我が紫やさぶらふ」

と、うかがひたまふ。「源氏ににるべき人もみえ給はぬに、かの上は、まいていかでものしたまはむ」と、聞きゑたり。

の注として、

「まいて」という比況の副詞に、「光る源氏」よりも女主人公たる「紫の上」を高く評価する作者紫式部の気持がうかがわれる。『源氏物語』が、源氏の君を主人公とする男性の物語ではなく、万人向きの空想的な人格、源氏の君という理想的な男性を触媒としての、女性の種々相を描く、女の物語であるというのが、(略)三十年來の筆者の持論である。⁽²³⁾

種々相を描く、女の物語であるというのが、(略)三十年來の筆者の持論である。⁽²³⁾ 『紫式部日記全注釈』上巻475頁
と述べて居られる。いかに和漢の文字に精通した権威として知られていても、藤原公任を『源氏物語』の真の理解者として紫式部が認めていたかはこの箇所からは疑わしい。このくだりは公任の発言よりも、公任の発言を否定的に捉えた自らの思いを記すことにウェイトが置かれているようである。

第六章

光源氏物語が短編始発か長編始発かという論争は女主人公は誰かという問題を大きく左右しかねない。短編始発説は藤壺第一説に、長編始

発説は紫上第一説に傾きがちなのである。これは、後編物語が大君の死と中の君の入水で終る予定であったと仮説する藤村潔氏⁽²⁾（この仮説は一般に認められているだろう）が浮舟物語よりも大君物語を第一に考えて居られるようであることから、見易い道理である。例えば、短編始発説の清水好子氏は、

光源氏の人間像は、藤壺への恋によって生命の火をともされるのである

世に許されぬ男女の密かな愛によって、栄達が可能になったのである。ここに、秘密の愛が社会的政治的な場における成功の源になっているという図式が見られる。⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾

と述べ、紫上は藤壺の「身代わりの人」と見做しがちである。だが、ジャン・ジャック・ルソー、スタンダール、バルザック等フランス文学に於いては人妻が年下の男と恋愛し、教育する関係が美化されている、と言うと言い過ぎであるがパターンとして定着しているのに対し、不倫の結末が誰かの血を見ずに済まないというのが日本上代文学のパターンである。藤壺の理想性に異を唱えるつもりは私にも無いが、光源氏との関係に就いて言えば、光に底知れぬ苦悩を与え、朧月夜事件等幾つかの失敗の遠因になっているように思われる。

私が長編始発説を提唱し、このシリーズに於いて補強を続けている理由の一つは、藤村潔氏⁽²⁾、秋山虔氏らの紫上第一説に賛成するためである。秋山氏は次のように述べている。

源氏が、紫の上への愛着を日に日に深めていったのは、六条院世界を秩序の破綻なく保持しつるのがまさに彼女の並はずれた知恵才覚ゆえであることへの感謝のしからしめるところであったろうが、しかしよりいっそう、その馴れ初め以来、通例の尺度をもってしては計りがたいありようで共生してきた彼女との仲らひの歴史への回帰が願われたというべきであろう。源氏は彼自身取り籠められている体制に対していわば紫の上に依り縋ることで人間の回復を求めたのだというべきか。

ここで明らかにされている通り、紫上はせいぜい六条院や二条院を取りまとめる程度で、藤壺のように宮廷社会で政治家として光源氏を援護することは無かった。単なる「私的な慰めの対象にすぎなかった」⁽²⁸⁾のである。あくまで精神面で支えになることに終始し、「人間の回復」を与えたことが夫の人生の成功と円満な晩年の源となったと私は思うのである。

男性を主人公とする長編小説の場合、最初に巡り合った女性登場人物が第一の女主人公になるとは限らない。そして彼女達は初登場の場面から、第一の主人公として特別扱いされるわけではない。『失われた時を求めて』のアルベルチヌ・シモネは、「花咲く乙女たち」(Jeunes

filles en fleurs)の一人として初登場し、その姓が「Simonet シモネ」であつて、「Simonnet シモネ」で無いことを男主人公が知るのはしばらく後である。このようなアルベルチーヌは、尼君の「子」として初登場し、その後もっと正確に素性が知られることになる点など、紫上と一脈通するところがある。又、『戦争と平和』のナターシャも、テザートのプリンに関心を寄せるたわいもないエピソードで初登場し、初期の章では、将来の第一主人公の片鱗を少しも見せない。雀の子を犬君が逃がしてしまった程度のことと泣いてしまつ、たわいもないエピソードも、しかし、若菜巻の菩薩的理想性と対照させるため、それを見据えて書かれたのだ、といつのが長編始発説の立場である。若菜巻で光源氏の正妻となり紫上を脅かすが朱雀院の三番目の女の子に決まったのは、いつであるのかわからない。しかし、泣いたり笑ったり、感情がすぐ顔に出る若菜巻の十歳の少女が、その天真爛漫さは失わずに、感情を抑制したほうが良い状況ではさりげなく抑制するようになる成長の軌跡は、大筋に関して初めから決まっていたと思つのである。

源氏物語の作者は誰か。

私は二年間か三年間かに一度、文学史の問題として右のような出題をする。今まで「紫式部」といつ以外の答えに接したことはない。それくらい有名になつてしまつたために、「源氏物語の作者が紫式部である」といつこの文学史的意義は充分に顧みられなかった。

『徒然草』や『土佐日記』の場合、作者は誰かという問いに対して、一応は固有名詞で答えが返つて来る。しかし『枕草子』や『蜻蛉日記』、『更級日記』の場合、実はそうは行かない。返つて来るのは作品の生成に関与していない男性の固有名詞や官位であり、又、「母」や「娘」という統柄を示す普通名詞のみである。『蜻蛉日記』がいかに名文であるうと、作者は自らの名前を歴史に刻むことはできなかった。しかし、右大将にまで出世した優秀な男の子を産んだ彼女はまたよい。かわいそうなのは『更級日記』の作者である。菅原孝標には何人かの女の子が居た。そのうちの長女なのか、でなければ何番目の女の子なのか、二十世紀の人間に覚えてもらえなかつたからである。『源氏物語』の文学的達成がもしも『更級日記』と同じ程度に留まつてしまつたら、その作者は今だに「藤原為時女」と呼ばれているだろう。もしも『枕草子』と同じ程度であつたならば、その作者は今だに「藤式部」と呼ばれているだろう。しかし、彼女は紫上を上手に描くことによつて、「紫式部」といつ、右のどの作者名とも対句にならず、どの男性からも独立した、作者名を勝ち取つた。大穴牟遲神がスサノヲとの戦いに勝つて大国主神と成つたように、小碓命が熊曾建兄弟との戦いに勝つて倭建と成つたように、『源氏物語』の作者は、紫式部として生まれたのではなく、

紫式部に成ったのである。

〔注〕

- (1) 「光源氏物語現行形態試論 初期巻々を中心に」、『国語国文』第五十九巻第10号、平成二年。「光源氏物語現行形態 試論第二中期巻々を中心に」、『北陸古典研究』第七号、平成四年九月。「光源氏物語現行形態試論第三 後期巻々を中心に」、『富山大学文学部紀要』第十九号、平成五年三月。「光源氏物語現行形態試論第四 大正十一年和辻論文の諸問題」、『北陸古典研究』第十一号、平成八年十月。「光源氏物語現行形態試論第五 一人の語り手」、『説と大鏡の方法』、『富山大学文学部紀要』第二十七号、平成九年八月。「光源氏物語現行形態試論第六 先行物語の季節」、『北陸古典研究』第十五号、平成十二年十月。
- (2) 『中古文学』47号(平成三年五月)所収。
- (3) 『文学』昭和二十五年六月号、七月号初出。昭和六十一年四月『国文学解釈と鑑賞 別冊 源氏物語をどう読むか』等に再録。
- (4) 『源氏物語』の引用は、小学館新編全集本に拠る。
- (5) 口頭発表は、平成十年七月、名古屋平安文学研究会。
- (6) 渋谷氏のこのサイトは、ヤフー(yahoo)等で検索されたい。私が検索したのは2001年7月12日。
- (7) 『国文学解釈と教材の研究』第四十五巻第14号(平成十二年十二月)所収。
- (8) 拙稿「試論」。所収は注(1)参照。
- (9) 「源氏物語の基本的構造」(昭和四十六年『源氏物語の構造第二』に再録)、「玉鬘系後記挿入説について」(昭和五十五年『源氏物語の研究』)等。高橋亨氏も、先行研究として藤村潔氏の名前と研究書名を挙げつつ、竹取物語や宇津保物語の二重構造が、紫上系玉鬘系の二重構造へと受け継がれた旨、指摘している。「成立論の可能性」(昭和六十一年四月『国文学解釈と鑑賞 別冊 源氏物語をどう読むか』)。「長編物語の構成員 宇津保物語」「初秋」の位相」(大修館昭和六十二年『日本文学講座4』)の「一 複式構造」。従いたい。
- (10) 『別冊国文学』として、学燈社より刊行。

- (11) 「成立構想論の脱構築」。所収は注(7)参照。
- (12) 拙稿「伊勢物語三段階成立論統紹第二 六つの批判への再反論と第四十五段詳述」、『富山大学人文学部紀要』第三十三号。平成十二年八月。
- (13) 新潮文庫本に拠る。原卓也氏訳。上巻11頁参照。
- (14) 「古代物語の読者の問題 物語音読論批判」(昭和四十六年『物語文学論攷』に再録)。
- (15) 江川卓氏新潮選書『謎とき・カラマツソフの兄弟』(平成三年)。特に「Ⅵ 3と13の間」等参照されたい。
- マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』にも細かな齟齬はけっこう多い。ちくま文庫全十巻本(平成四年)五年、井上究一郎氏訳の訳注など参照されたい。
- (16) 139頁以降参照。
- (17) 大正二年『国文学全史(平安朝篇)』。
- なお、このような藤岡氏の見方に対して、最近(平成十年代)では、準拠論や王権論など、光源氏の政治的成功、権力獲得の過程に物語の「本意」があるという見方が主流に成って来ているようである。阿部好臣氏「成立構想論の脱構築」(所収は注(7)参照)も「本居宣長は、中世源氏学を排除してしまっただけだが、だからと言って当然ながら宣長説にむやみに従いはしないわけで、準拠論が現代に復活した様相は、清水好子『源氏物語論』(塙書房、昭和四一)等の成果として燦然と輝いている。」と述べて居られる。ただ、両者は平行的に研究が推進されるのが可能な関係にあるわけではないだろう。私は今の所歴史書にくらいし、その他幾つかの理由で、準拠論や王権論に参加するつもりは無いだけである。
- (18) 中村良一氏「おいらか」「おほどか」について、『和歌山大学学芸学部紀要(人文科学)』8、昭和三十三年。
- (19) 『紫式部日記』の引用は、小学館新編全集本に拠る。
- (20) 昭和十七年『源氏随放』第二項。
- (21) 出席者は、室城秀之氏(司会)、安藤徹氏、上原作和氏、大井田晴彦氏、越野優子氏、安田真一氏。平成八年『新物語研究4 源氏物語を読む』(三谷邦明氏・室城秀之氏・吉井美弥子氏編)所収。

(22) 集成本に拠る。45頁。

(23) 通説では「若紫やさぶらふ」とある箇所、萩谷氏は、拙稿本論に記した通り、「我が紫やさぶらふ」と漢字表記している。しばらく、通説に従いたい。

(24) 昭和四十一年『源氏物語の構造』。

(25) 集成本第一巻解説。石田穰二氏と共著。

(26) 「紫の上」(昭和六十一年『源氏物語必携Ⅱ』所収)。

(27) 注(29)の著書、特にIの一で、紫上の理想性が詳述されている。「紫上は、一応教育という一つの大きな抵抗を経て理想の形象性を獲得するということになっていたのであって、そこに作者によって歴史的、社会的現実に立って積極的に追求された理想性を紫上に認めることの根拠がある。」「作者は、後見、経済力、神冥の力(古代的な力)そうしたいっさいの外的な力から解放された理想的な女性を一代かぎりの紫上を描くことによって追求しようと試みたもののようである。」「紫上が源氏のいう数少ない理想の人柄で「おいらかなる人」とされている。以上は、物語の主人公たる源氏君の意見に徴した紫上の人柄である。」「いっぽう、藤壺第一主義は、研究史に即してみれば、本居宣長の「ものあはれ」論の延長線上にある理解なのかもしれない。もっとも私は近世にくらく、特に宣長の平安文学研究は全く知らない。しかし、もし「ものあはれ」論が藤壺との恋愛を美化したり、道徳への反定立としての文化のパターンとして容認したりするものであるとすれば、私は非を鳴らさずには居られない。」

(28) 新典社平成元年『新注 源氏物語抄』の「解説」。15頁。久下晴康氏・元吉進氏。

(29) 深沢三千男氏『源氏物語の形成』、昭和四十七年。

(30) 短編始発を前提とする松尾聡氏「紫の上」一つのやゝ奇矯なる試論「は、第三十三帖「藤裏葉」までの紫上は利己的性格・女としての平凡さが見られ、真に理想性が見られる第三十四帖「若菜上」以下と断絶していると述べて居られる。」「国文学解釈と鑑賞」昭和二十四年八月)。従えない。本拙稿本論で述べた通り、須磨巻 若菜上巻の人柄には顕著な共通性があるし、「人間の成長」という視点も導入しつつ、十歳の初登場の後三十余年間連続した形象として読んで行きたい。

所謂第一部と第二部の間に大きな断絶を見ようとする松尾氏の立場は、例えば武田宗俊氏「源氏物語の最初の形態」の第十章(『文学』

昭和二十五年初出)にあるように、『うつほ物語』の大尾「楼の上下」が藤裏葉巻に対応するという根拠に拠るのだから、私は、拙稿「試論第三」で述べた通り、幻巻に対応すると考えている。武田氏の藤裏葉巻対応説の根拠は、「めでたしめでたしで終わる」、上皇らの臨幸もある、という普遍的なものであるが、私の幻巻対応説の根拠は、月並みの記述といふかなり排他的な共通性であり、又、巻全体に及ぶ特徴である。